

# 令和元年度函館支部活動報告

## 1. 研究構造について

### < 函館支部 研究主題 >

運動に魅力を感じ、自ら学び、高め合う体育活動の創造  
～生涯スポーツを目指したカリキュラムの実践を通して～

### < 目指す子ども像 >

「かかわりの中で主体的に運動に取り組む子」  
運動に夢中になって取り組む子 仲間と学び合い伝え合う子 運動課題の解決を目指して努力する子

### < 今年度の重点活動 >

- ① 「グループ学習」を中核にした『チーム学習』の研究      ② 中学校との連携

## 2. 授業実践報告

・令和2年2月10日(月)

函館市立東山小学校：柏教諭      4年生『キャッチバレーボール』

< 学習の道すじ (全7時間 本時6/7) >

	1	2	3	4	5	6	7
学習内容	オリエンテーション①	ねらい①			オリエンテーション②	ねらい②	
	学習の流れを知り、キャッチバレーボールにふれよう!	キャッチ・トス・アタックでゲームを楽しもう! (ドリルゲーム) (練習試合)			「victoryシート」を生かして、チームをパワーアップさせよう!	アタックで得点を取り、勝利を目指そう! (リーグ戦)	

### < 授業研究のポイント～教師の意図 >

#### ① ルールの工夫

##### a. 必ず3回で返す

～ 返球回数は、バレーボール本来のルールによりふれることを視野に、レシーパー・セッター・アタッカー三様の役割を学ぶこと、扱い回数を最大限にすることで、より安定してアタックによる得点に繋げることができるようにすること、個々の児童がより多くボールに触れアタックに繋げることで、仲間と協力することの大切さを味わわせるために、3回で返すこととした。

##### b. 3球目のアタックの意識化

～ 3球目でのアタックを児童に意識させた。このことで、チーム内の仲間とボールを繋げる意識をより高め、仲間と協力することの大切さを育てるとともに、アタックで得点を取る喜びを味わわせようと考えた。

##### c. レシーブ・トスにおけるキャッチの使用

～ 仲間と協力してプレイするためには、味方内でのボール操作を安定させ、アタックにつなげる必要がある。そのため、レシーブとトスをキャッチにすることで、より繋がりやすいよう、ルールの簡易化を図った。

#### ② 課題解決の手立て

##### a. 学習の道すじの工夫

～ ネット型の学習において、仲間とのプレイが繋がるようにするためには、個々のボール

操作を安定して行える技能の向上も大切である。そのため、単元の前半では、アタックゲームやレシーブゲームを取り入れ、楽しみながら技能の向上を図る学習を取り入れた。

単元中盤では、自分たちの学びの振り返りをもつ1単位時間を設けることによって、児童がリーグ戦に向けて課題を再認識したり、再設定したりすることで、自己（チームも含む）の課題を解決する力を伸ばすことを意図した。

そして、単元後半には、身に付けた技能を発揮できるようリーグ戦を設け、勝敗を競い合う中で、態度面や技能面の向上につなげたいと考えた。

#### b. victory シートの活用

～ 児童一人一人やチーム単位での振り返りのためのシートを、体育館に掲示した。掲示して可視化することによって、児童は、自己（またはチーム）の成長を自覚できるとともに、学習課題の解決の手立てとしても、活用することができるものになる。（昨年度検証済。）

また、指導者としても、児童の学びの様子を適切に見取ることができ、指導に生かしていくことができる。シート内容についても、児童の発達段階を考慮し、付箋を活用しながら行うことができるものとした。

#### c. ICT の活用

～ iPadを使って学び方や動き方を映像として見せることによって、児童に共有化を図り、課題解決に結びつけやすくする。また、児童のよい動きなどについて記録した映像を使って価値付けを行い、自己有用感をもたせたり、さらなる学びの意欲化に結びつけたりした。



## <成果>

- 児童が、練習やゲームに、笑顔で楽しく取り組む姿が見られた。毎時間の学習を楽しみにしており、各家庭でも児童が進んで体育の学習のことを話す場面もできていた。
- 3回で返すようにルールを工夫したことによって、児童は役割を明確にするとともに、仲間とボールをつなげることで、仲間意識を高めることができていた。
- 3球目のアタックを意識したことで、児童は練習内容にアタックを取り入れ、より強いアタックを打てるように協力し取り組むことができていた。また、ゲームでも、強いアタックを打つ児童が、たくさん見られた。
- レシーブとトス時にキャッチを取り入れたことで、味方内でのボール操作が安定し、アタックにつながる場面をたくさん生み出すことができていた。
- 単元前半に、ドリルゲームを行ったことで、ボール操作の技能が上達したり、ボールの方向に体を向けたりすることができるようになった。
- victoryシートを活用することで、児童一人一人が自己の成長を簡単に記録し、次の学びにつなげようとしていた。
- iPadを使って学び方や動き方を映像として見せることによって、自分の役割や動きをより認識することができるようになり、ゲームでの動きにつながっていた。
- バレーの楽しさを存分に味わうことができおり、中学校に上がる年代になっても、体育活動を楽しく行うようになっていくと感じられた。

## <課題・検討事項>

- victoryシートの記述内容が、個々の児童としての振り返りにとどまり、チームという視点で記述されている内容が少なかった。また、victoryシートの記述内容を活用した話し合いまでにはいたっていなかった。前学年までの振り返り活動の積み上げの必要感を感じた。
- ゲームの中で、どんどんネットに詰めてプレイする場面が多く、コートの後ろがどのチームも空いていた。ひと工夫あってもよかった。
- プレイが上手な児童が、少しレベルの高いゲームを体験できる場面があってもよいのではないかと感じた。

## 3. 令和2年度に向けて

今年度の授業研究では、採用2年目の柏先生に授業を行っていただき、何より、柏先生自身が函館の体育実践に基づいた授業を行うことで、児童のより一層の変容を感じ取っていただいたこと、教材研究が楽しいと思ってくれたことが一番の成果であったと思う。令和2年度では、「チーム学習」という視点に向かいながら、中学校体育研究会ともより一層の連携を図り、研究実践を積み上げていきたいと考えている。